



親子で料理を作る

八月二十七日、中央公民館で「親子料理教室」が開かれました。参加した二十五組の親子の中には、男の子もおり、慣れない手つきながら「シーチキンピラフ」「ポテトスープ」作りに懸命でした。

演歌に酔う

市商工会主催の「渥美二郎ショー」が、八月二十四日、葛塚中学校体育館で開かれました。入場者は、昼、夜あわせて約二千五百人で、渥美二郎の熱唱に聞きほれていました。



晴天続きの影響か、今年はアメリカシロヒトリが異常発生しています。見つけたらすぐ退治して下さい。なお、防除機は農政課にあります。

福俵を贈って十一年

大正生まれの婦人で組織する葛塚地区大正会は、今年も地区の敬老会で九十歳の人に贈る福俵をつくりました。つくった俵の数は、十一年間でおよそ三百個になるそうです。



(20)

下土地亀の「おまえつばら」

通称「おまえつばら」とよばれてきた場所が、下土地亀地内の新井郷川ばたにある。この場所は細長い下土地亀の家並みが新井郷川



おさむらいの昼食宿、治太郎どんの杏の古木 (樹齢200年以上)

を中にはさんだ対岸の樋の内側にある。おさむつばらにいわば上通りの三左衛門どんから七内どんにかけての川むかいで、今も民家は一軒もないはらつばらになっている。正確には「おうまのはら」お馬の原」であって、馬をつないだ所だが、「おんまつばら」から「おまえつばら」になまってしまった。「おまえつばら」は溝口配下の騎馬のおさむらいが魚釣りの際に馬をつないで置いた所なのだ。おさむらい衆はおまえつばらで馬を降り、対岸の下土地亀衆に声をかけ、数ある川舟(おおもむね八俵積のもの)をチャーターして三々五々の舟釣りを楽しんだ。この間、兩岸の道路をも通行止めにしたと伝えられているので、二三百メートルの間は立入禁止区域として新井郷川を借り切つて行われる魚釣り大会のような情景がほうふつする。

今は昔、新井郷川もこのあたりはとくに深みが多く格好の釣場とされ魚持小屋も置かれていた。兩岸には栗や胡桃の古木がうっそうと繁茂し豊かな水量と調和していた。水面にとび出してしつらえた厚板の川渡(かわど)は日ごろ農家の屋外勝手場よろしくにぎわったが、魚釣りのときはひとほらとなり、おさむらいだけが氣勢で釣糸を垂れていたわけだ。やがて、午の刻昼食の時間がくる。おさむらいさんの休憩所は「おまえつばら」の対岸中央の治太郎どん(江部さん)を常宿とした。そして食事の席には酒が添えられた。このときの殿様と呼ばれる身分あるおさむらいの使用した酒杯(木製のもの)が最近まで桐箱に納められて治太郎どんに保管されていた。残念なことにこの酒杯は家屋普請のとき紛失してしまった、という。

など、嘉永元年生まれの治太郎どんによって(江部正次さんの祖父)口伝えされてきた。往時をしのぶものといえ、今はもう通称「おまえつばら」の地名と、おさむらいの昼食宿、治太郎どんの庭に生きる杏の古木だけになってしまった。杏の古木は樹齢二百年以上と伝えられているがいまもお沢山の実をつけている。

市史調査員 中富敏治

表紙のことば

上土地亀の金川五郎治さん(五五歳)の家では、今では珍しくなつた「ハサかけ」を行っています。ハサにかける稲は約六反分で、作付面積の一割位だそうです。とつたわらは、奥さんのトヨミさん(五二歳)が農閑期に縄をぬうために使うそう、長男の則夫さん(二九歳)と三人で農作業に汗を流していました。

編集室

▽ 特集した「みんなの達人」は、大勢のお年寄りの中から二人にインタビューしました。取材して感じたことは、としはとつても皆さん記憶力が大変良いということと生活の中に張りを持っていくということでした。これからは丈夫で長生きして下さい。

▽ まちづくりなどについて市民の声を聞きつけた「シリーズ」を今回で終わります。ご協力頂いた皆さんありがとうございます。ご意見などお待ちしております。